



KODOMO TOSHOKAN

# ワシリイのむすこ

那須田 稔



〈著者紹介〉

な す だ      みのる  
那 須 田      稔

1932～

静岡県に生まれる。愛知大学中国文学科中退。幼少年期をハルピンですごす。1946年日本に帰り、「詩と詩人」「列島」などの詩同人誌により作詩活動をつづけ、後、主として児童文学の著述生活にはいる。おもな作品に『シラカバと少女』（実業之日本社・日本児童文学者協会賞受賞）『チョウのいる丘』（講談社）などがあり、多くの読者をもっている。

〈画家紹介〉

いく      ざわ      ろう  
生      沢      朗

1906～

兵庫県生まれ。日本美校卒業。専門、油絵・挿画。画集『氷壁』（朋文堂）などがある。

NDC 913 那須田 稔

ワシリィのむすこ

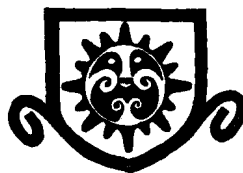
那須田 稔

大日本図書 1969

117 p. 22cm

小学校中・高学年向

子ども図書館



1969年7月10日 初版発行

©

著者／那須田 稔／発行者 河村敏雄／発行所 大日本図書 東京都中央区銀座1—9—10〈〒〉104 東京(03) 561—8671—9 振替 東京 219 番／印刷 東洋印刷／製本 岸田製本

ワシリィのむすこ

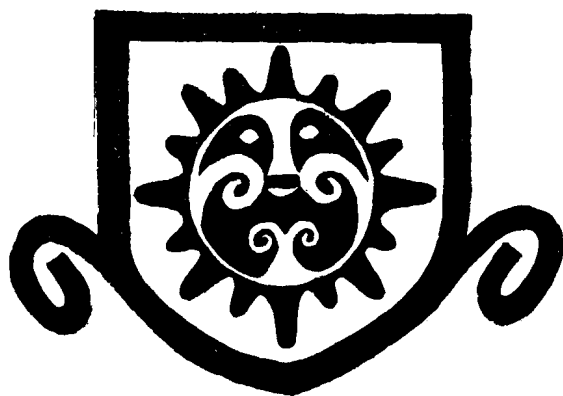
8393-217344-4398

定価 380 円

子ども図書館

# ワシリイのむすこ

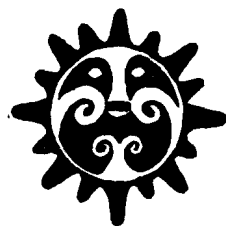
那須田 稔



大日本図書







もくじ

ワシリイのむすこ

第1章 海のむこうからきた少年・7

- 1 ワシリイさんのこと・8
- 2 友だちは永遠えいえんにこない・17
- 3 すばらしいニュース・25
- 4 海のむこうからきた少年・28
- 5 むすこよ、飛とびなさい・34

第2章 文<sup>ぶん</sup>ちゃんのサーカス・41

- 1 ワシリイ作品展<sup>てん</sup>はじまる・42
- 2 期待<sup>きたい</sup>はずれ・44
- 3 文<sup>ぶん</sup>ちゃんのひっこし・48
- 4 文<sup>ぶん</sup>ちゃんのサーカス・56
- 5 恵理<sup>えり</sup>のおとうさん・59
- 6 セルゲイの回復<sup>かいふく</sup>・63

第3章 飛とびなさい、そばかす君・71

- 1 セーターあみ・72
- 2 火事の知らせ・76
- 3 ひなまつりの夜・79
- 4 心の羅針盤らしんばん・82
- 5 消きえたセルゲイ・92
- 6 セルゲイ救助作戦きゆうじょさくせん・102
- 7 飛とびなさい、そばかす君・107

圖 裝  
幀

生 杉

沢 田

朗 豊



—〈第1章〉—

海のむこうからきた少年



den

## 1 ワシリイさんのこと

それは、まっさおな空のなかで、両手をひろげ、ジャンプしている少年の写真だった。少年のうしろには、遠く氷の山やまがつらなり、銀色にかがやいている。太陽の光をあびてきらめく山やまと、少年の写真には『ワシリイのむすこ』という題がついていた。

「これが、ワシリイのむすこか。」

宏子のそばで、父は、さっきから新聞をひろげてながめている。

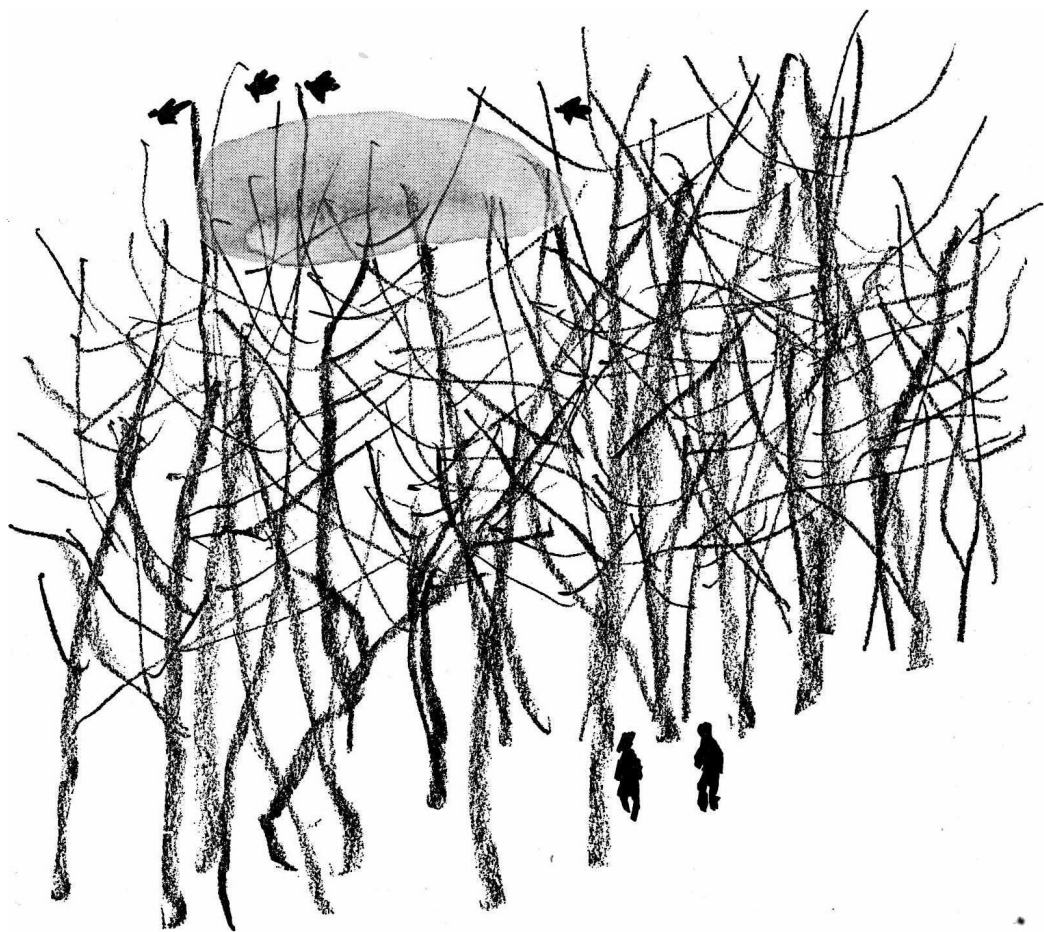
新聞の片すみには、ソビエトの山岳写真家ワシリイ・ペトロビッチの作品が印刷されていた。

その『ワシリイのむすこ』を、父は、たてから見たり、よこから見たり、遠くから見たり、顔をすりつけるようにして見たりしている。ときどき、「あのワシリイに、こんな大きなむすこがいるなんて、信じられん。」とつぶやいたり、ふんふんうなずいたりしている。きょう一日、父は、ほとんどなにもしないでその写真をながめていた。

宏子が、うしろから父の肩をポンとたたき、

「おとうさんたら、いつまでそうして見ていたら気がすむの。さっきからおかあさんが夕食のおかずがさめちゃうといっているわ。はやくいらっしゃい。」

と、大声でいうと、ようやく、父は、新聞をていねいにたたみ、ふところに入れ、茶の間においていった。



sign

「今夜は市の図書館で、ワシリイさんの作品展のうちあわせがあるはずでしょう。ぐずぐずしていると、遅刻しますよ。」

母にそういわれて、父は、たいせつな用事をすっかりわすれていたというように、あわてて食事をはじめる。

「おとうさん、スモレンスクから手紙がきてから、そわそわしていて、さっぱり仕事に手につかないようね。」

宏子（ひろこ）がいうと、父は、

「そりゃそうさ、宏子。なにしろあのワシリイがこの町にやってくることになったのだからな。」

そのうえ、作品展まで開くとなれば落ちつきはらっているというほうがむりじゃないかな。」と、おおいそぎで食事をすませると、背広に着がえて、あたふたと出かけていった。

「ほんとにおとうさん、うれしそう。」

母は、急須にお湯を入れながらひとりごとをいっている。

「それもそうさね。むかしの友だちにあえるのだから。」

ソビエトの首都モスクワの西のほうにスモレンスクという、人口二十万ぐらいの町がある。その町に住んでいるワシリイ・ペトロビッチさんからの手紙が父のところにとどいたのは、二か月ぐらいまえのことだった。

手紙には、つぎのようなことが書いてあった。

「親愛なる石田一郎。」

きみとシベリアでわかれてから長い時間がすぎていった。あれからわたしは、きみも知っているように、世界の山やまの写真をとりつつけて二十数年、ようやく約束をはたすことができそう

でうれしくおもっている。きみがいつもじまんしていた立山連峰を撮影するために日本を訪問する予定でいる。きみのふるさとの山を一日もはやく見たい。それから、できればきみの町で、わたしの作品展を開きたいのだが、どうだろうか。つごうを知らせてほしい。」

ワシリイさんの手紙がとどいた日の夜、父は、宏子と母に、「ひとつ、むかしばなしをしてあげよう。」とまえおきして、長い物語をはじめのだった。

むかし——といっても、太平洋戦争のころのこと、若ものたちは、だれもかれも戦場へ出かけていった。むろん、おとうさんもそのひとりとして中国へわたった。そして二年のち、日本は戦争に負けた。おとうさんたちの部隊はソビエト軍の捕りよとなって、シベリアの奥地につれていった。

いままでの生涯で、あんなにくるしいときはなかった。零下五十度をこすきびしい寒さのなかで、ろくな食物もあたえられずに、シベリアの原生林を切りひらく作業をしなければならなかった。なにしろ、一日に、おわん二はいのジャガイモ入りスープと黒パン三きれというひどい生活だったから。からだの弱いものはつぎつぎと病気になる、死んでいくものもすくなくなかった。

おとうさんたちは、ソビエト軍に、もっと日本人捕りよの待遇をよくするようにたのんでみたが、いっこうにねがいはいききとどけられなかった。

ある日、おとうさんが、渡辺さんという年とった兵隊さんとまぎづくりの作業をしていると、とつぜん、渡辺さんが動けなくなってしまった。渡辺さんは、まえから心臓が弱っていたのだった。そのとき、見知らない若いソビエト兵がはしってきて、渡辺さんをだきかかえると、そりにのせて病院へ収容してくれた。おとうさんは、ひとりでまぎづくりの作業をつづけていた。

シベリアの広原に日がしずみ、まっくらな夜がやってくると、おとうさんのからだはこおりつき、作業はおくれがちになった。防寒帽からはみ出ている鼻のさきなどは感じがなくなり、綿のてぶくろをしていても、ゆびのさきがいたいほどの寒さだった。それでも作業をやめるわけにはいかなかった。おとうさんが命じられた作業をほうりだせば、日本の兵隊みんなが罰をうけることになっていたから。さいしよのうちは、

「よいしよ、よいしよ。」

と、かけ声をかけてのこぎりをひいていたが、さいごには声も出なくなり、とうとう、気をうしなって雪のなかにたおれこんでしまった。しばらくして、おとうさんをよぶ声に、ふっと目をあけてみると、さっきの若いソビエト兵が心配そうに立っている。おとうさんの胸の名ふだを見ながら、木のおわんをさし出して、

「一郎、のめ。」

という。

口をつけてみると、それはあつくわかししたスープだった。そのスープのうまかったことはいまでもわすれられない。

おとうさんが、よろよろと立ちあがり、のこぎりをひきはじめると、その兵士も、いっしょにのこぎりをひいてくれるのだった。

「アジン、ドバァ（一、二、）。」

兵士は調子をとって、ふたりびきののこぎりの反対がわにまわり、のこぎりを力強くひく。おとうさんもそれにはげまされて、

「アジン、ドバァ。」

と、かけ声をかけてのこぎりをひいた。

「アジン、ドバァ！」

「アジン、ドバァ！」

ふたりの声が、こおりついたシベリアの空と、まっくらな原生林のなかにこだまして、北斗七星が北極星のまわりをひとめぐりするころ、ようやく作業がおわった。ほっとして、おとうさんが水をのみにいっているあいだに若い兵士のすがたは、けむりのように消えていた。

それからまもなく、おとうさんたち日本人捕りよの待遇ががらりとかわった。三どの食事の量もふえ、作業時間も減った。あとからきいたところによると、おとうさんをたすけてくれた若いソビエト兵は、新しく収容所に派遣されてきた監督官だった。ワシリイ・ペトロビッチという若い監督官はそれからもときどきおとうさんたちのところにウオトカやボルシチをもつてたずねてきた。どういうわけか、おとうさんとワシリイ・ペトロビッチはとても気があった。なにかといえは、

「一郎、一郎。」

と話しかけてくる。

半年もいっしょにくらしているあいだに、おとうさんは、かたことではあったが、ロシア語でどうにかワシリイと話ができるようになった。背たけも、年齢も、おとうさんとそんなにちがわなかったし、スキーもじょうずで、おとうさんとよく競争したものだ。山のぼりのすきなこともそっくりだった。おとうさんがふるさとの立山連峰のすばらしさをじまんすると、スモレンスク出身のワシリイも負けずに、じぶんの町の近くにあるバルダイ丘陵の美しさをほこらしげに話してきかせた。

ひと冬をこしてつぎの年の秋、おとうさんたちが日本へ帰るとき、ワシリイは駅までわざわざ見送りにきてこういった。

「一郎、世界がほんとうに平和になったら、きみの国の山を見に出かけるよ。」

宏子の知らない父の若い日の物語だった。いまは、北陸の町のガス会社につとめながら、若い人たちといっしょに山岳救助隊にはいつて、山で遭難する人たちのいのちをまもるためにかつやくしている父と、世界の山の写真をつとっている山岳写真家のワシリイさん——ふたりの友人の再会の日をすばらしいものにしたいと、宏子はおもわずにはいられなかった。

それから、宏子はあるこれとワシリイさんのことを想像してみた。もし、父にたタイプなら肩はばがひろく、がっしりしたからだつきをしているだろう。目は、なに色かしら。ブルーだといい。かみの毛は茶色——宏子は、かつてにワシリイさんのすがたを頭にえがいてから、父に、「ワシリイさんがきたら、じいちゃんの山小屋へつれていかなくちや。」

といった。

「ああ、おとうさんも、そうおもっていたところだ。ワシリイも立山にのぼれば、おとうさんがじまんしたのも、まんざらのほら話ではないとわかるだろうよ。」

と、父は、たのしそうにわらった。

じいちゃんの山小屋からながめる立山山頂のすばらしさは最高だ。スマートな山ではないけれど、ごつごつと空につきささっていく雄大さは、宏子の心をふるわせる。

はじめて、宏子が父につれられてじいちゃんの山小屋へ出かけたのは六歳のときだ。じいちゃんのじまんの山小屋は、六じょうぐらいのへやと、三じょうぐらいのへやが二つあるだけの小さなた



